

初版『資本論』「価値形態」の研究 (3)

尼 寺 義 弘

Ⅲ. 相対的価値の第3の, 転倒された, または逆の連関にされた第2の形態

Ⅲ. は12のパラグラフから成っているが, 「付録」および『現行版』のような区分けはなされていない。「付録」では, §. 1. から §. 5. まで, 『現行版』では, 1. から 3. まで「見出し」によって区分けされている。最初に「Ⅲ. 相対的価値の第3の, 転倒された, または逆の連関にされた第2の形態〔以下, 形態Ⅲ, と略す〕」を構成する価値諸等式が示されている。形態Ⅱでは「20エレのリンネル」を相対的価値形態に置き, 等価商品がそれぞれ「=1着の上着 または =u量のコーヒー または =v量の茶…」というように横につづけて結ばれる一列の価値等式が示されていた。形態Ⅲではリンネル以外の各商品が相対的価値形態に置かれ, 等価形態に唯一の商品「20エレのリンネル」を共通にとる各価値等式が縦にすべてあげられている。その意味で形態Ⅲは形態Ⅱが転倒され, 逆の連関にされた価値形態である。しかし形態Ⅱの一列の価値等式を結びあわせた「または(oder)」はなくなっている。さらに「付録」および『現行版』の形態Ⅲでは, 等価形態に共通なものとして20エレのリンネルが「1個」だけ代表としてあげられているが, 「本文」では各等式ごとにそれがあげられている。また相対的価値形態に「付録」および『現行版』では登場している「2オンスの金」が「本文」ではまだ登場していない。最初のパラグラフから順次

みていくことにしよう。

(1) 形態Ⅲを構成する価値諸等式はそれぞれ, たとえば 1着の上着=20エレのリンネル というように, その本源的な姿である形態Ⅰに復帰している。だがこの等式は, 形態Ⅰのように, 上着の価値を上着の体から区別して自立したものとして表現する価値形態を意味しているだけではない。形態Ⅲのその等式は「上着をすべての他の商品にたいしても価値として表示しており, したがって上着の一般的に妥当する価値形態 (allgemein gültige Werthform)」を意味している。すなわちリンネルを除くすべての他の商品が, 上着と同様に, それらの価値を同じ商品「リンネル」で表現する「共同的な価値表現 (gemeinschaftlichen Werthausdruck)」をもっており, そのことによって諸商品は「=x量のリンネル」という関係において互いに価値として質的に等置し量的に比較しあうことが述べられている。このことは同時にまた諸商品が同じ人間労働の物質化として互いに表示しあうことでもある。形態Ⅲはこうして諸商品の統一的な価値表現 (einheitlichen Werthausdruck) を意味しており, この形態においてはじめて価値は「それに照応する交換価値としての現象形態」をとるのである。すなわち「付録」の表現を借りるならば「価値形態は価値概念に照応する」(Das Kapital, Bd. I., 1. Aufl., S. 779.)のである。

(2) 形態Ⅱでは, 既述のように, リンネルは

一つの特等的等価物としての各個別の商品およびそれら全体の商品と連関する。どの個別の商品も、形態Ⅰの「個別的等価物 (einzeln Aequivalent)」のように、リンネルに対して等価物そのものとしてはいまだ認められてはいない。互いに他の等価物を排除しあう「特等的等価物 (besondres Aequivalent)」である。それでは形態Ⅲの等価物はどのようなものであろうか。「本文」はここで重要なことを述べている。

「逆の連関となった第2の形態であり、したがって第2の形態に含まれている形態Ⅲにおいては、これに反して、リンネルはすべての他の商品にたいして等価物の類的形態として現われる。それはまるで、分類されて、動物界のさまざまな、属、種、亜種、科、等々を形成している、ライオン、トラ、ウサギ、および、すべての他の現実の動物とならんで、そのほかになお全動物界の個体的な具体化である動物なるものというものが存在するかのようなものである。自分自身のうちに同じ事柄の実際に存在しているすべての種を包括しているような個別的なものは、動物なるものとか、神、等々のような一般的なものである。したがって、リンネルは、他の一つの商品が価値の現象形態としてのリンネルに自分を連関させることによって、個別的等価物となったのと同じように、リンネルはすべての商品にとって共同的な価値の現象形態として、一般的等価物、一般的な価値肉体、抽象の人間労働の一般的な物質化となる。したがって、リンネルに物質化されている特殊な労働は、今や、人間労働の一般的な実現形態として、一般的な労働として妥当しているのである。」

リンネルは等価物の類的形態 (die Gattungsform) として現れる。それは「動物なるもの」とか「神」とかいうことで表現されるような一般的なものの個体的な具体化 (individuelle Incarnation) である。すなわち、属、種、亜種、科、などに分類される動物界全体を構成している現実のさまざまな個々の動物のほかに、

動物界全体を自己のうちに体現した動物そのものの概念が具体的にある一つの特定の動物のうちに存在しているかのようなものである。

「動物なるもの」とか「神」のような一般的なものは観念のうえにおいて概念としては存在するが、現実には存在しない。すなわち現実的なものから抽象された抽象物である。ところが形態Ⅲのリンネルは自分のうちにすべての種を「包括している (einbegreift)」個別的なものであり、言葉の本来の意味で「一般的なもの (ein Allgemeines)」である。すなわち自然界などでは考えられない一般的なものが商品の世界では実在するのである。こうして一般的な等価物はリンネルなる姿態において実在するのである。「個別的等価物」→「特等的等価物」→「一般的等価物」へと展開される等価形態の種差とそれらの具体的な担い手となる商品の関係が考察され、さらに類的形態としての一般的等価物のもつ独自の意義が神とか動物なるものとの対比において明示されている。

ところで、一般的社会的なものである価値が個別的自然的なものであるリンネルにおいて具体化されているのはどうしてであろうか？周知のように価値形態論では、形態Ⅰ「リンネル＝上着」において、すべての価値形態に共通するものとして1商品・リンネルの価値が他商品・上着の使用価値において現象する関係が分析されている。そこでは上着は欲望の対象としての使用価値ではなくて価値そのものである。つまり上着は使用価値の意味を全く失なってしまっただけで価値の化身となっているのである。上着は上着でありながら上着ではなくて価値の体化物としての意義をもつのである。この転倒した関係について「付録」の形態Ⅰの「等価形態の第2の特性」はつぎのような興味深い叙述をおこなっている。

「価値関係およびそれに含まれている価値表現のなかでは、抽象的一般的なものが具体的なものの、感覚的現実的なものの、属性として認められるのではなくて、逆に、感覚的具体的なものが抽象的一般的なものの単なる現象形態ま

たは 特定の 実現形態として 認められる のである。たとえば等価物である上着のなかに含まれている裁縫労働は、リンネルの価値表現のなかでは、人間労働でもあるという一般的な属性をもっているのではない。逆である。人間労働であるということが裁縫労働の本質として認められるのであり、裁縫労働であるということは、ただ、裁縫労働のこの本質の現象形態または実現形態として認められるだけなのである。この取り違えは不可避である。というのは、労働生産物に表示されている労働が価値形成的であるのは、ただ、その労働が無区別な人間労働であり、ある生産物の価値に対象化されている労働が別種の一生産物の価値に対象化されている労働と全く区別されないかぎりにおいてのみのことだからである。

この転倒によっては感覚的具体的なものがただ抽象的一般的なものの現象形態として認められるだけであって、逆に抽象的一般的なものが具体的なものの属性として認められるのではないのであるが、この転倒こそは価値表現を特徴づけているのである。それは同時に価値表現の理解を困難にする。もし私が、ローマ法とドイツ法とは両方とも法である、と言うならば、それは自明なことである。これに反して、もし私が、法というこの抽象物がローマ法においてとドイツ法においてと、すなわち、これらの具体的な法において実現される、と言うならば、その関連は神秘的になるのである。」(S. 771.)

等価商品・上着およびそれをつくる裁縫労働においては神秘的なことがおこる。すなわち現実的なものの単に一属性としてあるにすぎない「抽象的一般的なもの (das abstrakt Allgemeine)」が、その属性を本質としその本質の実現形態として「感覚的具体的なもの (das Sinnlich-Konkrete)」が把握されるという「取り違え (quid pro quo)」がおこなわれるのである。この転倒は価値を形成する労働が一般的人間的なものであることから必然的である。価値表現ではこのように事物の一つの「属性 (Eigenschaft)」であるものが「本質 (Wesen)」

として認められ、その本質の実現形態として事物が妥当するのである。まさに法なるものがローマ法とドイツ法に実現されるということと同様の神秘化である。この転倒が形態Ⅲでは一層発展し完成される。形態Ⅰでは「逆の連関」の成立により等価商品のこの転倒性は曖昧である。だが形態Ⅲでは前述のようにリンネルが「等価物の類的形態」として存在している。「本文」では述べられていないが一般的等価形態に特定の商品、たとえば金が社会的に癒着すればその転倒性は不動のものとして固定化されるのである。ところで、形態Ⅰでは個別的等価物が上着として、形態Ⅲでは一般的等価物がリンネルとして実在する。普遍的なものである価値が特定の使用価値に自己の実現形態をもっている。とりわけ形態Ⅲでは「等価物の類的形態」として、「すべての種を包括している個別的なもの」としてリンネルが普遍的なものである価値を具現しているのである。普遍的なものが概念としてのみでなく現実に自己の実現形態を個別的なものに具体的にもつということが価値表現を特徴づけているのである。こうした普遍的概念が個別的なものにおいて現実に実在するということは商品世界に特有なことである。

ところで、マルクスは初期の著作である『聖家族』の「思弁の構成の秘密」において、具体的なものから抽象された普遍的なものが本質であり、それが個別的なものを生み出すという思弁哲学者の戯言を徹底的に批判している。すなわち思弁哲学者は現実の果物であるリンゴ、ナシ、オランダイチゴ、ハタンキョウなどから「果実なるもの」という「本質」をつくりあげ、さきのリンゴ、ナシなどの種々の果物をこの果実なるものという本質のたんなる「実在様式 (Existenzweise)」として論ずるのである。つまり「果実なるもの」という一つの抽象物を絶対的主体として、その主体の自己区別・自己活動として個々の果物の多様な定有をつくり出すのである。こうした「思弁の構成」はいわば言葉の遊戯であり、事物の本質はけってとらえられず事物のもつ豊富な諸規定にはけって

到達できないものである^{注1)}。

ところが、商品世界に特有な価値形態では自然界では夢想さえされないこうした思弁が必然的なものとして通用するのである。既述のように、たとえば、「動物なるもの」とか「神」のような普遍的なものが価値形態では形態Ⅲのリンネルとして実在し、すべての種を包括する等価物の類的形態をなすのである。その根拠は商品の価値が自然的なものではなく社会的なものであり、価値を生み出す人間労働がすべての労働に共通な同等性にあるからである。

なおすでにみたように「本文」の形態Ⅰの第5パラグラフとその注(19)においても同様のことがつぎのように述べられていた。リンネル＝上着 において人間労働が裁縫労働において具体化されるのであるが、これはヘーゲルの「概念」が外的対象なしに自己を客観化しようというのと同じことである。なおこの第5パラグラフで論じたことは『現行版』では登場していないが、たとえば、『現行版』のつぎの叙述も同じことを述べているといえる。

「裁縫労働の形態でも織布労働の形態でも、人間の労働力が支出される。それゆえ、両方とも、人間労働という一般的属性をもっているものであり、また、それゆえ、一定の場合には、たとえば価値生産にあっては、ただこの観点からのみ考察されうるのである。こういうことは、なにも神秘的なことではない。しかし、商品の価値表現では、事柄はねじ曲げられる。たとえば、織布労働が、その織布労働としての具体的な形態においてではなく、人間労働としての一般的属性においてリンネル価値を形成することを表現するためには、織布労働にたいして、裁縫労働が、すなわちリンネルの等価物を生産する具体的な労働が、抽象的人間労働の、手につかめる実現形態として、対置されるのである。」(Bd. I., S. 72—73.)

(3) 形態Ⅰでは、商品Aの価値が商品Bで表現されることによって商品Bは個別的等価物となる。そのばあい商品Bはその使用価値の種類がどのような特殊な種類のものであるかということはどうでもよかった。つまり商品A以外の一商品であればそれがどのような種類の商品であっても個別的等価物としての役割を果たすのである。だから使用価値および使用価値を生み出す労働を他のそれから区別する「特殊な規定性」は全くどうでもよかったのである。さらに形態Ⅱにおいてはリンネルの等価商品となるすべての他商品はそれぞれ特殊な等価物であり、したがってすべての他の種類の具体的な労働は人間労働の「特殊な実現形態」として認められているにすぎないのである。

ところが、リンネルが一般的等価物となると事情は異なる。リンネルはすべての他商品の使用価値種類から区別されたまさに「リンネル」という特殊な規定のままですべての他商品の一般的価値形態となり、したがって一般的等価物となる。リンネルを織る労働はすべての他の種類の有用労働と区別されるその特殊な規定をもった労働のまま人間労働の一般的な実現形態として、一般的な労働 (allgemeine Arbeit) として妥当しているのである。

なおここで形態Ⅰの等価商品はいずれの種類の商品でもよいということの導入として、リンネルによる上着の価値表現は実現された人間労働としてのリンネルへの上着の連関であり、人間労働の実現形態としてのリンネル織り労働への連関であるという価値表現のメカニズムが再び説かれている。

(4) 商品と商品とを結びつけるものは価値であって使用価値ではないことが明示される。すなわち使用価値としては商品は他人のための、したがって「社会的な欲望 (gesellschaftliche Bedürfnisse)」の対象であるかぎり社会的な規定性をもっている。だが、その欲望が誰からでたものであれ有用物に対する人間の欲望

注 1) K. Marx, Die heilige Familie, M-E-W, Bd. 2., S. 59—63.

という関係におくにすぎず、商品と商品との「社会的な関係 (gesellschaftlichen Rapport)」におくものではない。使用対象を商品に転化させるものである価値こそが諸商品をその関係におくのである。

価値としては商品は抽象的人間労働という同じ単位の表現である。商品は交換価値の形態において互いに価値として現れ、価値として関係しあう。価値としてのこの関係は同時に諸商品がそれらに「共通な社会的実体 (gemeinsame gesellschaftliche Substanz)」としての抽象的人間労働へ還元され、同じ単位の表現として互いに関係することを意味している。

「諸商品の社会的な関係は、もっぱら、このような自分たちの社会的実体のただ量的には違っているが、質的には同じであり、したがってまた互いに置き換えられることができ、互いに交換されることができる諸表現として認められる、ということにおいて成り立っているのである。……諸商品が互いに諸価値として、人間の諸労働凝固体として、認められるところの形態が、それらの社会的な形態なのである。つまり、商品の社会的な形態と、価値形態または交換可能性の形態とは、同一のものである。」

商品の社会的な形態について述べた以上のことは、それが直接的であるか間接的であるかは別として、商品と商品との価値関係にあるいずれの商品についても言うことである。

ところで、商品の価値形態は商品の社会的形態であるが、「もしある商品の自然形態が同時に価値形態であるならば、その商品は他の諸商品との直接的交換可能性の形態をもっており、したがってまた直接に社会的な形態をもっているのである。」すなわち自然形態が同時に価値形態であること、つまりここでは等価形態の商品が直接にもっている経済的形態規定性について述べているのである。〔形態Ⅰの第3パラグラフ参照。〕

(5) 1着の上着=20エレのリンネル という同じ一つの価値等式も形態Ⅰと形態Ⅲとではそ

の性格が異なる。形態Ⅰのその等式は個別的で偶然的なものであるのに対してリンネルを共通の等価物とする形態Ⅲではそれは価値等式の系列の一分枝をなしている。すなわちリンネルが個別的等価物から一般的等価物に進展していることによって区別されるのである。ところで相対的価値形態と等価形態という両極の形態上の区別は形態Ⅰでは「形式的でありかつ消滅的である (formell und verschwindend)」。というのは形態Ⅰの 1着の上着=20エレのリンネルは「直接に逆の連関 (unmittelbar die Rückbeziehung)」の等式 20エレのリンネル=1着の上着 を含んでおり、この転倒した価値等式では両極の形態規定は正反対のものとなるからである。形態Ⅰのこのような両極の「同じ度合で、互いに相手方へ展開すること (gleichmäßige und gegenseitige Entwicklung)」は形態Ⅲではもはや生じない。形態Ⅲの転倒された価値等式 20エレのリンネル=1着の上着 の上着 は「特殊的等価物」となり、リンネルと同じ「一般的等価物」とはならない。つまり形態Ⅰのように対等な相互的な両極の展開はなくなるのである。

形態Ⅲが「一般的である (Allgemein)」のは、すべての商品が例外的な一商品・リンネルを共通の価値表現から排除し、諸商品の唯一の等価物とすることによって成り立っている。したがって一般的等価物の相対的な価値表現は他の諸商品と共同的な相対的価値形態をもたないで、形態Ⅱの姿態をとる独自の (spezifischen) 表現の様式である。その一分枝としてさきにみた 20エレのリンネル=1着の上着 が存在し、上着はリンネルの単なる特殊的等価物となるのである。したがって形態Ⅰのような両極の均衡的な形態規定の展開は排除されているのである。〔形態Ⅰの第12パラグラフおよび (1. Aufl., S. 780—781.) 参照。〕

(6) 形態Ⅲでは、すべての商品が自分の自然形態と異なる「=x量のリンネル」という価値形態をもっている。「リンネル」という形態に

において諸商品は「交換されうるものとして、量的に規定された比率で交換されうるものとして互いに連関しあうのである」。すなわち、1着の上着=20エレのリンネル、u量のコーヒー=20エレのリンネル ならば、1着の上着=u量のコーヒーである。だから商品の自然形態は「=x量のリンネル」という媒介を通してのみ、「回り道 (auf diesem Umweg)」をしてのみ互いに価値の現象形態として認められるのである。したがって諸商品は直接には交換されうる形態をもってはいないのである。すなわち「諸商品が直接的であれば、それらは直接に交換されえないのである。つまり、それらは互いに直接的交換可能性の形態をもっていないのであり、言い換えれば、それらの社会的に妥当な形態は媒介された形態なのである。逆に言えば、すべての他の商品が価値の現象形態としてのリンネルに自分を連関させるので、リンネルの自然形態が、すべての商品との直接的交換可能性の形態となり、したがってまた直接に一般的社会的な形態となるのである。」

このように価値表現の回り道とは商品の価値が直接的にではなくて間接的にしか表現されないこと、すなわち他商品を媒介にして手段としておこなうことである。そこで手段となる商品の自然形態が逆に直接的に社会的に妥当する形態をとるのである。「回り道」はここでは形態Ⅲの形式をとおして諸商品が間接的に価値として互いに映しあう関係を述べている。すなわち

$B=A, C=A$ ならば、 $B=C$ である。
〔形態Ⅰの第7パラグラフ参照。〕

(7) 一般に商品の直接的な形態は使用価値の形態であり価値の形態ではない。価値の形態は他商品との関係においてのみ間接的にあるいは相対的にとりうるものである。したがって価値形態は媒介された形態である。諸商品が価値として、人間労働という同じ種類の凝固体として互いに関係しあうためには統一的な、一般的な相対的価値形態を自分に与えなければならぬ。一商品が一般的等価形態の地位にあるのは

すべての他商品がそれらの価値をその商品で一般に表現するかぎりである。あるいはその商品がすべての他商品の価値の表現材料として役立っているかぎりである。したがって一商品が一般的な直接的交換可能性の形態あるいは直接に社会的な形態にあるのは、すべての他商品が直接に交換されうる社会的な形態をとっていないからである。形態Ⅲの相対的価値形態と等価形態との種差をここでも述べているのである。

(8) 一商品の一般的な直接的交換可能性の形態はすべての他商品の非直接的交換可能性の形態と不可分離の関係にある。ところが、この関係が一般には理解されていないのである。たとえば、ブルードンのように、すべての商品に同時に直接的交換可能性の形態を与えることによって商品生産の矛盾を解消しようとするような妄想がそれである。この考え方はすべての労働者を資本家にすることができるとか、すべてのカトリック教徒を教皇にすることができると妄想するのと同じである。磁極の陽性と陰性とが不可分であるように、一般的な相対的価値形態と一般的等価形態とは互いに前提しあいながらまた互いに排除しあう不可分な二つの極である。価値表現の両極を分極性つまり不可分性と排除性との統一として把握している。このばあい排除性是对立の一モメントのことであり、それを矛盾と誤解しないことが肝要である。〔形態Ⅰの第8パラグラフ、『現行版』(S.63—64., u. S. 82.) および同版(注24)、拙著第二章参照。〕

(9) こうして一般的等価物となる商品は直接的に社会的労働の物質化 (Materiatur) であるが、他の諸商品は直接的に社会的ではない諸労働の物質化である。(7), (8)で述べた両極をなす商品の形態規定を労働の観点から、社会的労働と非社会的労働の対立という根本視角から論じている。

(10) すでに述べた両極の形態規定を一層くわしく論じている。一般に商品生産の条件とは社

会的分業の発展と私的所有と言われているが、その本質をなす私的労働のもつ意味を詳細に分析し、「社会的であること (Gesellschaftlichkeit)」の根拠を述べている。商品生産のもとでの諸労働は「農民家族」にみられるような直接に社会的な共同労働ではない。直接には私的労働として互いに独立している労働である。しかも素材的には社会的分業の特殊の諸分枝をなすものとして互いに依存しあっているのである。ところで私的労働の社会的形態とは何か？それは「商品の分析」が明示しているように、具体性を捨象された同等な労働としての、人間労働としての相互の関係である。商品生産のもとではこの人間労働であるものとしての連関そのもの (diese Beziehung selbst) が、私的労働の独自の社会的形態 (die spezifisch gesellschaftliche Form) として認められるのである。ところが私的労働のいずれもが直接に人間労働という社会的な形態をもってはいない。それはちょうど商品が直接には価値という社会的形態をもっていないのと同様である。

「社会的であること」の基準はそれが属するそれぞれの生産様式に固有の諸関係から説明されねばならない。商品の世界では一般的等価物の形成とそれへの連関という「回り道」をして「社会的であること」が表示されるのである。すなわち私的労働の直接に社会的な形態は、第一に労働の具体性を捨象された抽象的な形式におけるそれであり、第二にそれへの諸労働の還元は抽象的人間労働の直接的な実現形態として

のリンネル織り労働に等置されることによって回り道をしてなされるのである。こうして形態Ⅲの両極の形態的区別すなわち非直接的交換可能性の形態である相対的価値形態と一般的な直接的交換可能性の形態である等価形態との明確な区別が私的労働の社会的形態とは何かという根本的観点から論じられている。そのうえで両極は「非社会性」対「社会性」という対立として展開されるのである。このパラグラフでは「回り道」の根拠を「私的労働の社会的形態とは何か」という視角から論じ、他の生産様式との対比もなされている^{注1)}。〔本文〕(S. 8.) および『現行版』「呪物性論」参照。〕

(II) 個別的等価物→特殊的等価物→一般的等価物へと等価形態にある商品が展開されるのは、相対的価値形態にある商品の展開の反映とその結果であるにすぎない。ところが等価形態の展開につれ直接的交換可能性に代表されるその独自の性格があたかもそれを担う商品の自然的性質から生まれでてくるような仮象 (Schein) が固定化されてくる。諸商品のその商品に対する全面的な連関の単なる反射 (Reflex), すなわち「反省規定」の結果であるにすぎないことが全く忘れられてしまうのである。というのはつぎのことから述べられうる。1) 形態Ⅲの両極を担う商品の形態規定は「逆の連関」が均一に成立する形態Ⅰのように同じ割合で (gleichmässig) 展開されない。形態Ⅰでは逆の連関の均等なことからこのまちがった仮象は固定

注 1) 奥山忠信氏は拙著『価値形態論』の書評においてこのパラグラフのなかでマルクスの述べている「商品は、生来、一般的な交換可能性の直接的な形態を排除しているのであって、したがってまた一般的な等価形態をただ対立的にのみ発展させることができる」を引用し、価値等式を所与のものとみる分析者の立場をマルクスがあたかも疑問としているかのように論じている。だが、価値等式は価値の実体規定に基礎づけられているものであり、いわゆる価値等式の抽出の問題とここでマルクスの述べている価値形態の両極の形態規定の区別の問題とは直接に結びつくもので

はない。氏は価値の実体と価値の形態との関連および価値形態それ自体における「形態内実」、それらの種差さえもが全く意識されていない。(『経済学批判』7, 社会評論社, 1979年, 188ページ。)

「実体」規定と「形態」規定の根本的な無理解にもとづくこの考え方は宇野派に共通する誤謬である。たとえば、中野正『価値形態論』日本評論社, 1958年。鈴木鴻一郎『価値論論争』青木書店, 1959年。玉野井芳郎『経済理論史』東京大学出版会, 1977年。参照。

化されにくい。すなわち形態Ⅲの等式を転倒しても一般的等価物が成立するのではなく形態Ⅱをなす特殊的等価物が成立するにすぎないのである。2) 一般的等価物は等価物の類的形態としてすべての他の商品から排除され区別されている。すなわちその特別の地位は特定の1商品が占めておりすべての他商品はそれをとらない。3) 一般的等価物は個別商品の「私事」としての連関の結果ではなく諸商品の社会的な共同事業の成果として特別に生みだされたものである。ところが、一般的等価物の経済的形態規定性がそれを担う1商品とともに自立化し、他との連関から切りはなされてその商品の物理的・化学的・審美的等々の自然諸属性と不可分に結びつき、あたかも自然属性の一つとして一般的直接的交換可能性の形態を生まれながらにもっているかのようにみえるのである。諸商品のその唯一の商品に対する全面的な連関の結果であるにすぎないものであるにもかかわらずである^{注1)}。〔形態Ⅰの第11, 12および形態Ⅲの第5パラグラフ参照。〕

(12) 形態Ⅲの最後のパラグラフである。リンネルが「どのようにして (Wie)」一般的等価物となりえたのか、という経緯について反省を与えている。一般的等価物は相対的な価値表現が形態Ⅰ→形態Ⅱ→形態Ⅲへと展開されて成立したものである。したがって形態Ⅰが一般的等価物の「萌芽」である。この展開において「リンネルは自分の価値量の一つの他商品で表示することから始め、すべての他商品の価値表現のための材料として役立つことで終るのである。リンネルについてあてはまることはどの商品についてもあてはまる。」すなわちリンネルが単なる商品から一般的等価物としての商品へ

とたどった経緯を要約し、つぎの形態Ⅳへの移行について述べている。ところで、形態Ⅱはリンネルが一般的等価物となりうるための「唯一の媒介項」^{注2)}であったが、形態Ⅱにおけるリンネルの相対的価値形態という地位はそれが商品であるかぎりいずれの他商品が占めてもけっして不思議なことではない。「付録」および『現行版』のように貨幣形態、したがって金商品との結びつきが「本文」では直接には排除されているために上記のような叙述となりつきにみる形態Ⅳへとつながるのである。

形態Ⅳ

形態Ⅳを成立させる価値等式は、リンネルが相対的価値形態の地位を占めることに代表される形態Ⅱにおいてリンネルの特殊的等価物の役割を果す上着やコーヒーや茶などが逆にそれぞれ相対的価値形態の位置にある無数の形態Ⅱの総計である。金商品は登場していない。形態Ⅳは二つのパラグラフからなり、前のパラグラフはこの形態の独自性を述べているが、後のパラグラフは価値形態論全体のまとめである。

(1) 形態Ⅳを構成する各系列の価値諸等式はすべての商品が形態Ⅱの形式をとる等式よりなりたっている^{注3)}。ところで、それらの各系列の価値諸等式をそれぞれ「逆の連関」におくならば上着、コーヒー、茶などの各商品——それらはリンネルの特殊的等価物として役立っていたもの——が一般的等価物となる。一般的等価形態はすべての他商品に対立する関係にある一商品にのみ属するものであるが、それは商品であるならばいずれの商品でもその地位につきうる資格がある。したがって表現形式からみるならば、上述のように形態Ⅱの「逆の連関」によるすべての商品が一般的等価物となる価値形態

注 1) 商品の呪物崇拝的性格については武田信照「商品の呪物性」愛知大学『法経論集』第84号、1977年。および荒木勉夫「物神性再論」山形大学紀要(社会科学)第11巻第1号、1980年、参照。

注 2) 見田石介「資本論の方法」見田著作集第4巻所収、大月書店、1976年、182頁。

注 3) すべての商品が形態Ⅱの形式をとる形態Ⅳは「付録」および『現行版』の形態Ⅱの「欠陥」規定の(3)として生かされている。(1. Aufl., S. 778., u. Bd. I., S. 78.)

が成立しうるのである。だが、そうした事態は現実には存在しえない。なぜならすべての商品が一般的等価物となるとすれば、それはすべての商品をつくるすべての私的労働が直接に社会的労働であるということになり、さきに形態Ⅲの(10)でみたように、商品生産を成立させる根本条件である私的労働のもつ意義を全く否定することになるからである。こうした誤りは、さきに形態Ⅲの(8)でもみたように、陽性と陰性とからなる磁極を、たとえば、陽性のみからなると考えるのと同様である。

一般的等価形態は商品の使用価値種類がどのようなものであろうとすべての商品がその地位につくうる可能性をもっている。だが、その地位は他のすべての商品に対立している唯一の商品にのみ属するものである。唯一の商品であってこそ商品世界は統一的・共同的な、したがって一般的に価値を表現しうる形態を獲得し、ここに価値の社会的な表現が成立するのである。だから、すべての商品が一般的等価物となるとすれば、全く逆説的に聞こえるかもしれないが、すべての商品が一般的等価物となりえず、一般的価値形態は不成立となり、商品世界の社会的に妥当な価値の表現形態は得られないこととなる。こうして形態Ⅳは一般的等価形態の否定を形式のうえで導くこととなっている。一見すると形態Ⅳの展開が価値形態の成立を否定するかのように思われるこの問題は従来いろいろと議論されてきた(注1)。だが、形態Ⅳはすべての商品が一般的等価物となりえないことを述べているにすぎない。すなわち唯一の商品が一般的等

価形態の地位につき、他のすべての商品がその地位から排除されていることを逆に確証しているのである。すべての他商品の非直接的交換可能性の形態と唯一の商品の一般的な直接的交換可能性の形態とが不可分であること、両極の形態規定の区別を述べているのであり、けっして価値形態の否定を述べているのではない。それは商品を分析し、それぞれの要因の形態規定をおこなうという観点の抽象性を貨幣形態とは厳密に区別して商品論というレベルに限定して論じたものである。それは形態Ⅲとの関連でいえば商品生産の社会性とは何かを述べているといえる(注2)。

(2) これまで論究してきた価値形態論全体のまとめである。商品の分析は価値形態のすべての本質規定を明らかにしている。すなわち1)商品の価値がどのようにして他商品の使用価値で表現されるか、の分析による「貨幣の即自」を証明すること。2)価値形態が相対的価値形態と等価形態という対立した契機(Momenten)からなること。3)形態Ⅱで表現される価値形態を変態系列において位置づけること。形態Ⅱは変態系列の「一通過段階」をなしているが、結局は(schliesslich)一般的等価物の「独自に(specifisch)」表現される価値形態となるのである(注3)。ここでは(1)でみた形態Ⅳの形式を事実上否定し、形態Ⅳを一般的等価物の相対的な価値表現の独自な形態としてみているといえよう。しかし商品の分析は価値形態論を商品形態一般の問題として考察しているのである。だからいずれの商品も一般的等価物という独自な形態規定をとりうるのであるが、ただそれは対立的にのみなしうるのである。一方の商品が相対的価値形態にあれば、他方の商品は必ず等価形態になければならないのである。「本文」の価値形態論の結びの文章はつぎのとおりである。

注1) たとえば、富塚良三氏は形態Ⅳを価値形態の不成立ととらえ、氏の特異な主張である「逆の連関」不成立をマルクスが意図していると解されている。だが、形態Ⅳは本文でも述べたように、商品論の段階で両極の形態規定の区別を厳密に述べたものであり、氏の主張は妥当しないものである。富塚良三『恐慌論研究』未来社、1962年、249—253ページ。および『経済原論』有斐閣、1976年、35ページ。

注2) 久留間敏造『価値形態論と交換過程論』29—34ページ。

注3) 形態Ⅱの形式をとる一般的等価物の「独自な」価値形態については「付録」(S. 781.)および『現行版』(S. 83.)参照。

「しかし、決定的に重要なことは、価値形態と価値実体と価値量とのあいだの内在的で必然的な関連を発見すること、すなわち、観念的に表現するならば、価値形態は価値概念から発生することを証明するということであった。」

この文章はすでに論じてきたように冒頭の商品の分析から価値形態の証明にいたるプロセスを要約した重要な結語である。「ブルジョア的生産諸関係の内在的関連を探究」した古典派経済学においても問題にさえされなかった価値の実体と価値の形態との内在的で必然的な関連の発見である。それはヘーゲル流に表現すれば価値の概念から価値の形態が必然的に生み出されるプロセスの証明であるといえる。

ところで、価値の実体と価値の形態との関連の重要性を述べたこの結語は「付録」および『現行版』では削除されている。削除の理由についてマルクスは何ら述べてはいないが、「付録」と『現行版』の価値形態をしめくくる結語をみることによってある程度その理由を垣間見ることができる。

「付録」の結語は述べている。

「要するに、本来の貨幣形態はそれ自体としてはまったくなんらの困難をも呈していないのである。ひとたび一般的等価形態が洞察されていさえすれば、この等価形態が金というような一つの独自の商品種類に固着する、ということを理解するにはいささかも頭を悩ます必要はない。同様に、一般的等価形態は、本来、すべての他の商品による特定の商品種類の社会的な排除を条件とする、ということもそうである。問題になるのは、ただ、この排除が客観的社会的な堅固さと一般的な妥当性とを獲得し、したがってかわるがわるいろいろな商品に付着するのでもなければ、商品世界の単に特殊な圏内で単に局地的な射程をもっているだけでもない、ということだけである。貨幣形態の概念における困難は、一般的等価形態の、したがって、一般的価値形態一般の、形態Ⅲの、理解に限られる。しかし、形態Ⅲは、逆の連関で形態Ⅱに分解し、そして形態Ⅱの構成要素は、形態Ⅰ、す

なわち 20エレのリンネル＝1着の上着 または x 量の商品A＝ y 量の商品B である。さて使用価値と交換価値とが何であるかを知っているならば、この形態Ⅰは、ある任意の労働生産物、たとえばリンネルを商品として、すなわち、使用価値と交換価値という対立物の統一として、表示するための最も単純な最も未展開な様式である、ということがわかる。そうすれば、同時に、単純な商品形態 20エレのリンネル＝1着の上着 が、その完成姿態 20エレのリンネル＝2ポンド・スターリング すなわち貨幣形態を獲得するために通過しなければならないところの諸変態系列が容易にわかるのである。」

『現行版』の結語は述べている。

「貨幣形態の概念における困難は、一般的等価形態の、したがって、一般的価値形態一般の、形態Ⅲの、理解に限られる。形態Ⅲは、逆の連関で形態Ⅱに、展開された価値形態に分解し、そして形態Ⅱの構成要素は、形態Ⅰ、すなわち 20エレのリンネル＝1着の上着 または x 量の商品A＝ y 量の商品B である。それゆえ、単純な商品形態は貨幣形態の萌芽なのである。」

このように「付録」および『現行版』の結語

注 1) 「本文」ではみられない貨幣形態に関する叙述が『現行版』ではつぎのとおりなされている。

「諸商品は、それらの使用価値の多様な自然形態とは著しい対照をなしている1つの共通な価値形態——貨幣形態をもっているということだけは、だれでも、ほかのことはなにも知らなくても、よく知っていることである。しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってはかつて試みられたことのなかったこと、すなわち、この貨幣形態の起源を証明することであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の展開を、その最も単純な最も見すばらしい姿から、光まばゆい貨幣形態に至るまでを追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである。」(S. 62.)

「単純な価値形態、すなわち諸変態の系列をへてはじめて価格形態にまで成熟するこの萌芽形態の不充分さは、一見して明らかである。」(S. 76.)

は述べている。マルクスが「弁証法的思考」に不慣れな読者にも理解できるように「学校教師風にさえ叙述するよう努め」た「付録」の価値形態および「付録」の叙述を大幅にとり入れた『現行版』の価値形態は、貨幣形態（価格形態）という人口に膾炙される表象から形態Ⅰへ遡及し、つぎに形態Ⅰから貨幣形態を論証するというのが方法上の重要な問題点であることが意識的に叙述されている^{注1)}。この叙述は確実に理解されやすい結語であるといっていよい。表象にある貨幣形態の価値形態論への導入と叙述方法の貨幣形態への収斂による非弁証法的な読者にとっても一般に理解されやすい表現の仕方とが、「本文」でみた価値の実体と価値の形態との関連およびそのヘーゲル流の表現をともしなうさきの簡潔な結語を削除することとなったのであろう。だが削除する必要はなかったのではないであろうか。というのは「本文」と「付録」と『現行版』とはそれぞれ表現の仕方は異なっているけれども「本文」の結語で述べた価値の実体と価値の形態との関連という商品論のレベルからみた質的内容を具現しているといえるからである。

「本文」の結語の末尾に付されている注²⁾は

なお『現行版』の呪物性論においても『初版』にない重要な指摘がなされているので引用することにする。

「人間生活の諸形態についての追思惟は、したがってまたその科学的分析は、一般に、現実の発展とは反対の道をたどるものである。それは、あとから始まるのであり、したがって発展過程の既成の諸結果から始まるのである。労働生産物に商品という極印を押す、したがって商品流通に前提されている諸形態は、人間たちが、自分たちにはむしろすでに不変なものと考えられるこの諸形態の歴史的な性格についてではなくこの諸形態の内実について解明を与えようとする前に、すでに社会的生活の自然形態の固定性をもっているのである。このようにして、価値量の規定に導いたものは商品価格の分析にほかならなかったものであり、商品の価値性格の確定に導いたものは諸商品の共通な貨幣表現にほかならなかったものである。」(S. 89—90.)

「商品の価値の分析から価値をまさに交換価値とするところの価値の形態を見いだしえな」かった古典派経済学の限界を指摘している重要な注であるが、結語の削除とともに『現行版』では「呪物性論」の注²⁾へと移されている^{注2)}。

むすび

『初版』「本文」において、上述のように、価値形態論がはじめて本格的にとりあげられている。価値形態論は『経済学批判』、『剰余価値学説史』においてもみることのできなかった商品形態の分析である。使用価値と価値との統一としての商品が自分自身を分化し、自然形態としておよび価値形態として自己を現象せしめ、商品形態として現実の運動過程へ入っていくまさにその準備の姿態の分析であるといえる。使用価値の形態は商品の自然形態であり理解に何らの困難は生じない。価値の形態は商品世界に独自の形態規定である。商品の価値は人間労働の凝固として「社会的なもの」である。この社会的なものは自分の自然形態では表現できず、他商品との連関において「回り道」をしてのみ表現されるのである。すなわち、20エレのリンネル＝1着の上着において、リンネルは使用価値としての上着ではなくて価値としての上着に自分を連関させて自分の価値を表現する。あるいは価値としての上着を自分に等置することによって価値表現するのである。この「連関」、「等置」において上着は上着の自然形態が直接に価値の形態として、自然形態における価値として現象するのである。使用価値は価値の対立物であるにもかかわらず、ここでは価値の現象形態として、使用価値の形態が社会的形態として転倒がおこなわれているのである。これは

注 2) 『現行版』の注²⁾で述べられている意味内容につき、価値形態と商品生産関係とのかかわりに焦点をあわせて考察した論文として梅垣邦胤『商品＝非直接的交換可能性』について(『下関市立大学論集』第23巻第1号、1979年)があるので参照されたい。

貨幣の即自形態あるいは萌芽形態である。

ところで「本文」は、「付録」および『現行版』のように、いわゆる探究の過程(貨幣形態→形態Ⅰ)と叙述の過程(形態Ⅰ→貨幣形態)が隠されており、さらに貨幣形態まで叙述されておらず、「形態Ⅳ」の問題などが存在し、種々に議論されてきた。しかしその議論は対象となる箇所たとえば形態Ⅳのみがとりあげられ、「本文」全体との関連において考察されることは少なかったといえる。われわれは全体の考察の結果としてつぎのことが述べうると考える。

「本文」は貨幣形態を背景としつつも「商品形態」の分析であることが明確にされているといえる。価値形態論は呪物性論とともに商品形態論としての位置づけが明確になされ、価値実体論との関連がたえず反省されている。すなわち価値形成労働が二商品の関係においてどのようにして表現されるかをたえずふりかえっているのである。さらに貨幣形態が意識的に度外視されることにより商品論のレベルで理論が一貫しており、理論の抽象性が堅持されている。すなわち「付録」および『現行版』では形態Ⅰから形態Ⅳ(貨幣形態)までのすべての価値形態において登場している貨幣形態ないしは金商品に関する叙述は「本文」では注を含めて数箇所しか登場していない。「本文」は現実の金商品との連関が切れており、商品が商品であるかぎりいずれの商品でも一般的等価物としての役割を果たしうることが明確に述べているのである。

貨幣形態およびそれと結びつく金商品が導入されることにより、マルクスにとっては思いもよらぬ途方なことであろうが、たとえば宇野弘蔵氏にみられるような貨幣形態と形態Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとの区別の主張あるいは貨幣の素材と形態規定とをたえず混同するような誤解が生ずる余地が「本文」では全くないのである。『現行版』においても主旨は同じであるが、「本文」では貨幣形態および金商品が完全に後景へと退き、度外視されることにより価値形態論が商品形態論の一翼を担うものとして純化されているといえよう。この商品論としての論理の一貫性が例

の「形態Ⅳ」の問題を生み出したといえるであろう。

さらに「本文」の叙述形式は、「付録」および『現行版』のように、見出しによる区分けや細分化がなされていず、また移行規定も明示されておらず一般の読者にとって整理された姿をとってはいない。まさにその意味で「学校教師風」ではない。したがって非弁証法的な読者にとって理解ははなはだ困難である。しかし価値形態に対するマルクスの考え方が如実にストレートに打ちだされており、「付録」および『現行版』とは異なる特別の意義を有するものと考ええる。

またヘーゲル弁証法との関係をみるうえにおいても多くの参考とすべき叙述がみられる。たとえば価値表現の「回り道」は、「他への連関」＝「自分への連関」という反省の論理が的確に援用されている。また価値形態論に対する判断論と推理論との関係とか、一般的等価物のアナロジーとしてあたかもライオン、トラ、ウサギなどとともに「動物なるもの」が具体的に存在するかのようなまさに神秘的な「概念実在説」を想起せしめる叙述とかがありヘーゲルそのものの理解にとっても参考となるものである。

(1981年6月30日)

参 考 文 献

見田石介『ヘーゲル大論理学研究』第1―第3巻、大月書店、1979―1980年。

同『資本論の方法』見田著作集第4巻、大月書店、1977年。

久留間敏造編『マルクス経済学レキシコン』⑩貨幣Ⅰ、大月書店、1979年。

同『貨幣論』大月書店、1979年。

平田清明『経済学と歴史認識』岩波書店、1971年。

同『コンメンタール「資本」1』日本評論社、1980年。

荒木勉夫「価値形態の秘密」(1)～(3)『山形大学紀要』第6巻第2号、第7巻第1号、第8巻第1号、1976―1977年。

関根猪一郎「貨幣の必然性とフランス語版『資本論』」東京都立大学『経済と経済学』第42号、1979年。